Shukugawa Gakuin College

19世紀のレセプションドレス

——複製による考察——

山　本　昌　子
吉　井　千　史
津　田　志由紀

The fact that costumes have a close relationship to the structure of a society of a particular time is undisputed. Therefore, in order to understand our present costume style better we should study the 19th century, a period of scientific and dramatic history. In England, the Industrial Revolution began in the latter half of the 18th century, and ended by the time of the Second French Empire in the 19th century. It brought all kinds of innovations to industry and commerce. The actual course of the Industrial Revolution was led by advances made in the textile industry. This indicates the primary importance of clothing manufacturing to the society at that time.

Mass production of high quality products at lower prices had now become possible due to various inventions and subsequent improvements in weaving and sewing machines, as well as concurrent developments in trade circulation influenced sewing styles and ornamentation.

The dress presented here has been reproduced as faithfully as possible from an article written by Akiko Ota and Atsuko Miyoshi in 'Dresstudy' magazine called "Machine-Made Lace of the 1870' s " (Spring 1987 pp16-21) . To use lace and ribbon as freely as the more common materials was unthinkable in the days of hand manufacture. In this example, 68.6 metres from five kinds of lace have been used, with widths ranging from 1cm to 8cm. There is also 17.4metres of three kinds of ribbon. The main dress material is 15metres of organdie linen, 92cm wide. The techniques and designs made possible by the new machine sewing are highly apparent.

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

1. 緒　　言

服装はその時代の社会体制とは密接な関係にあることは衆知のとおりである。19世紀に起った事柄は、それらのほとんどのことが20世紀への出発点であり、基礎になっているといわれ、多くのもの、事柄が変化し、発展しながら現代まで継続されている。今日の私達の服装についても例外ではなく現代に通じるものが多くあり、ヨーロッパ、特にフランスの服装に関して正しく理解するためにも、科学と歴史の世紀である19世紀に着目しなければならない。18世紀後半のイギリスに端を発した産業革命が、19世紀の第二帝政時代（ナポレオン３世）に完成し、この時期に技術、工業、商業上に大きな革新をもたらした。その産業革命の発端が、飛び梭の発明や紡織機、力織機の発明など、繊維織物産業であったということは、当時の社会にとっていかに衣生活が重要な地位を占めていたかをうかがわせる。さらにミシンの発明や織機の改良により、良質で安価な製品が大量に生産され、また流通、交易の発達によっても、衣服の素材、デザイン、装飾、縫製上に大きな変化がもたらされた。レースやリボンにおいても、これまでは富や特権階級のシンボルであったように、精巧な技術の手工レースは非常に高価であったため、衿やカフス等、衣服の一部分のみに使用され、しかも取りはずしが出来るよう大事に取り扱われていたが、機械生産が出来るようになってからは、手工芸の時代には考えられないくらい、生地の一部のようにふんだんに取り入れられて使用されるようになった。

今回取り上げた作品は、太田晶子、三好厚子、「1870年代の機械レース」『DRESSTUDY』、SPRING, 1987、京都服飾文化研究財団（K. C. I）、16～21ページに1870年代末のレセプションドレスのパターンが掲載され、またK. C. Iのご厚意により、実物を見聞、点検させていただく機会を得て複製を試みたものである。

2. 19世紀の社会

19世紀は、科学と歴史の世紀と呼ばれる。18世紀後半からイギリスに起った産業革命は、はじめ木綿産業部門から起り、後に鉄工業、工作機械、交通機関などの部門へと発展した機械と技術の大変革であり、衣料産業においてはミシンの発明とともに画期的な躍進をとげた。産業革命の結果、機械制大工場の出現と、大量生産、資本主義社会が確立し、新たに資本家と労働者の対立や社会問題が起り、これを背景に社会主義思想や労働問題も起ってきた。1789年、自由・平等・友愛の理念をもって行われたフランス革命は、衣生活における自由を実現した。文化や芸術もやがて王侯貴族から一般市民のものへと移行していく。フランスにおいても産業革命が始まり、新たに台頭した産業資本家が議会に進出し、王と対立するようになる。1830年の七月革命は、ブルボン王朝の反動政権に対する自由主義に基づき、1848年の二月革命は、七月

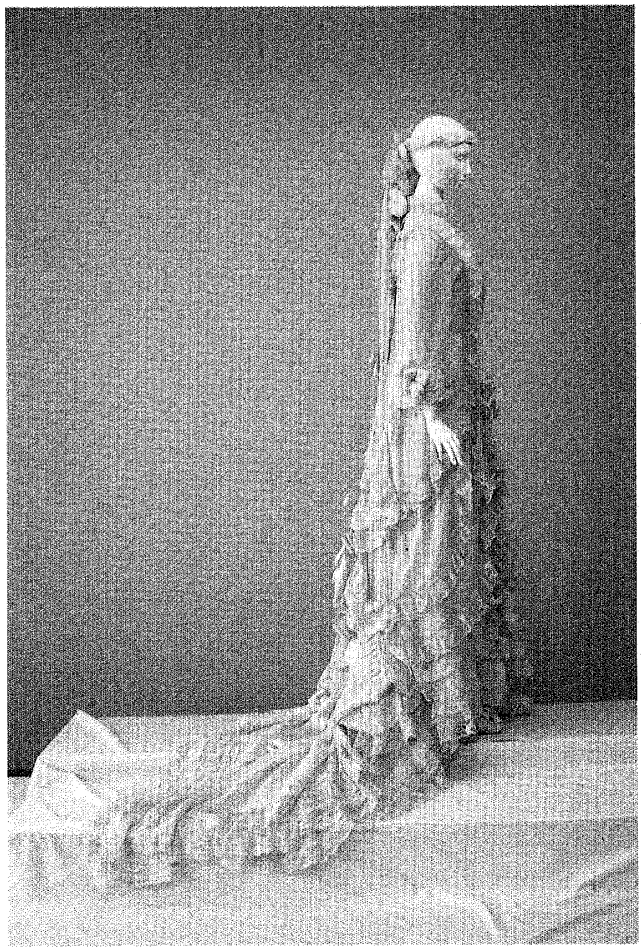
NII-Electronic Library Service

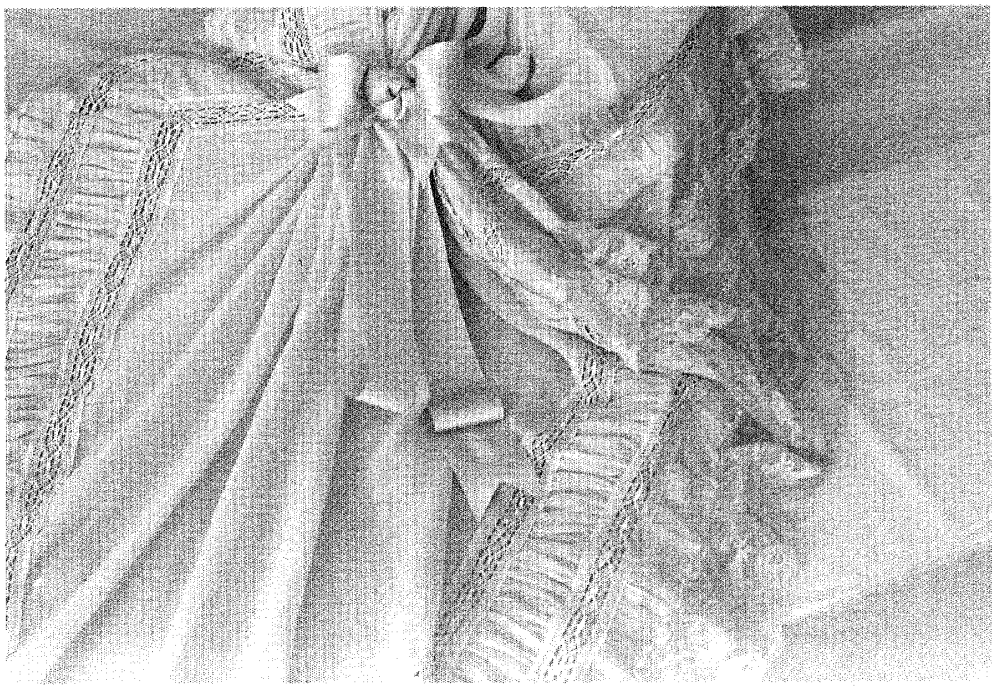
Shukugawa Gakuin College

1870年代のレセプション・ドレス

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College





NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

革命後成立した銀行家、商業資本家などの大ブルジョアジー政権に対する、いずれも市民革命であった。ブルジョアジーは強い経済力で長い間社会の指導者的立場にあり、また政治の面でも強い影響力をもち権力を握っていた。1852年国民投票でナポレオン3世が皇帝となって、第二帝政時代が始まり、彼のもとで産業革命は完成する。織物工業の飛躍的な発展、既製服生産の本格的発展、市場の拡大、デパートの発展等、人々の生活水準が向上し、小ブルジョア市民はもちろんのこと、労働者階級を含めたほとんどすべての階層の人々が、古着ではなく新しい服を着用するようになって、人々の外見は広くブルジョア風に統一されていく。この平均化によって、貴族階級はますます権威を誇示するために上等な注文服（グランド・クチュール）を考案する。モード産業にとってはまさに「贅沢は繁栄の源」であった。パリの衣生活をおおよそ支えていたのは仕立屋である。19世紀の彼等の存在は経済的にも重要であるばかりでなく、多くの人々がこの産業にかかわり、社会的にも大きな比重を占め、重要な役割で経済を支えていた。これより少し前の19世紀のパリでは、ブルジョアジーは毎シーズン毎にドレスをあつらえ、数回着用すれば、あるいはシーズンが終れば手離し、修理屋たちの手を経て古着屋へ移る。一般庶民の収入のほとんどは食生活に使われ、新しい衣料を購入する余裕はなかったため、これらの古着はごく当り前のように利用され、この後労働者階級へと譲られていくのである。既製服生産は徐々に組織化されてきてはいるものの、手工業でもあり、そこに働く女裁縫師や仕立職人の給料は、朝の7時から夜の8時まで食事時間を除いて働いて、2日間で3着の外套を仕上げれば1日2フランにはなったが、当時の生活費が1日平均約3フラン位であったことを考えると赤字である。仕事着の安いウールのズボンすら5フランであった。このように当時の社会の背面には、下積の生活者の厳しい労働と低賃金があった。

3. 19世紀後半の服装

本稿で取り上げた作品は、1870年代後半のものと思われ、その時代の特徴がかなりはっきり打ち出されている。1870年～1890年のいわゆる世紀末のファッションは、トゥール・ニュール時代（バッスル）ともいわれる。それまでの大きく巨大なまでに膨らんだクリノリンが日常生活にかなりの不便をきたし、時代の流れとともに後部のみになっていき、バッスルに変化したものである。このバッスルも大きくなったり、やや小さくなったりの変化を持ちながら、後半に入るとなだらかに後方に傾斜して、トレーンを形づくるようになった。この時代は、機械化によって量産されるようになった、安価で良質な布地やレースがふんだんに使用できるようになり、一着の服に10数メートルもの布を使用する場合、身頃や袖など各パーツの縫い合せや装飾を縫い付けるには、早くて丈夫なミシン縫は非常に大きな効果をもたらした。また技術的には、単に布と布との縫い合せや縫い付けのみならず、布にレースをはめ込んだ後にその部分をくり抜くなど、かなり考えられた技法も用いられている。

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

当時のヨーロッパは平和と繁栄の時代であり、人々の生活は安定し、上流階級の富はますます増大して社交生活も華やかに繰り広げられ、パーティやレセプションも盛んに開かれた。舞踏会は当時の主要な娯楽の一つであった。

1865年～1870年においてプリンセス・ラインが登場し、容姿をすらりと見せることからパリでは非常に流行し愛用されていた。

1870年代の後半の特徴として、まず第一にあげられるのは装飾性で、レース、リボン、花飾りなど、幾種類もの装飾品を多量に使用して華やかに装った。シルエットの特徴は、トレーンのあるオーバー・スカートをヒップにたくし上げたトゥール・ニュールで、これはヒップの膨らみと胸部の膨らみのバランスを保ちながら後にポイントを持っている。また横ひだ付きスカートやギャザー、プリーツ、フリル、ラッフル等をあらゆるところに使い、素材を変えて布地を複雑なテクニックでアレンジしてデコラティヴに装った。またタイトでローウエストのラインも優雅なシルエットであった。時代によりさまざまなファッションが繰り広げられるが、どの時代のモードでも女性達は、生まれつきの体の線や大きさまでも変化させようとする。19世紀後半の作品には、細い腰にやさしい撫で肩の美しい線がうかがえる。

4. 手工レースから機械レースへ

レースは服装史の中で一時代を築き、今なお装飾的、高級、エレガント、フォーマルなイメージの素材として親しまれているが、レースの歴史は案外浅く、16世紀の中期にイタリアのヴェネチアで生まれ、かなりの勢いでヨーロッパ全土に広まった。17世紀はレースの世紀といわれる程、イタリア、ベルギー、フランス、スペイン、イギリス、ドイツ、スイス他、多くの国々でそれぞれ特徴あるレースが生産され、国王や宮廷、貴族などの庇護のもとに大きく発展した。

レースは大きく分けて、ニードルポイント・レースとボビン・レースがあるが、いずれもヴェネチアで生まれたとされている。これは必ずしも定説ではないが、いずれにしろヴェネチアはレースの産地として最も栄えた地であり、フランスにも大量に輸出されていた。当時イタリアの各地を占領していたスペインと、その支配下にあったベルギーにも技術が伝えられ、さらにイギリスやドイツなどにも伝播し、各地でレース工業が起った。レース用語にフランス語が多いのは、17世紀後半に（ルイ14世時代）にフランスのアランソンにレースの技術者養成所を作り、フランスファッションと共にヨーロッパ各地にレースを輸出をしたためである。

各地レースの特徴

イタリアのレース

ヴェネチアのレースは、モチーフのつなぎの糸に小さなバラの花ビラ模様が付いているのが特徴で、ロザリナ・レースとも呼ばれる精巧を極めた優雅なものである。初期の自然のモチー

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

フを生かしたルネッサンス・レースから、次第にモチーフをつなぐメッシュの部分にも装飾性をもたせた力強いバロック・レースへと変化していった。

フランスのレース

○アランソンレース（ニードルポイント・レース）

アランソンはフランスの北西部の都市で、ここにルイ14世の臣下の大臣コルベールがレースの技術者養成所を作り、レースの生産を奨励した。

ナポレオン3世の妻、ユージェニー皇后の結婚衣裳には、25,000フランもする非常に高価なレースが使われたと言われている。

○ヴァランシェンヌ・レース（ボビン・レース）

ヴァランシェンヌはフランスの北西部の古い都市。ヴァランシェンヌ・レースは、両端または片端が柄によって直線あるいはそれに近い状態に仕上った最初のもので、模様は花柄が特徴。非常に高価で8㎜四方を編むのに1週間近くかかり、1着のドレスに12年もかかったといわれる。

○シャンティ・レース（ボビン・レース）

シャンティはパリ近郊の街で、シャンティ・レースは第二帝政時代に最も一般的に使用された。特徴は菱形のメッシュにあり、よこ糸を互いに交差させて、この中に花籠や果物の模様を編み、太い糸で縁どりする。19世紀後半にはフリルとしてすそ飾りに使われた。

○ブロンド・レース

ブロンドの名前は、このレースが最初にさらされていないクリーム色の絹で作られたことに由来する。模様はとじ板や花模様、つる草、水玉模様がある。マリー・アントワネットやユージェニー皇后がこのレースを好んで使ったと言われている。

イギリスのレース

○ホニトン・レース（ボビン・レース）

イギリスで作られるレースの中で最も美しいとされ、模様を作っておいてから中の地模様を入れ込んでいく。小枝模様が特徴。

イギリスのヴィクトリア女王が着用した白サテンの結婚衣裳のヴェールに使われた。

○機械レース

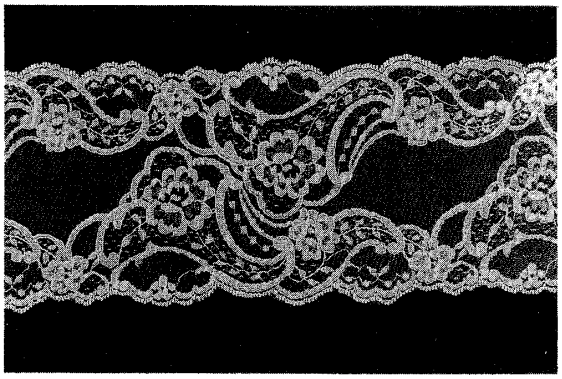
産業革命以後、急速に多くの種類のレースの高度な機械が発明改良された。

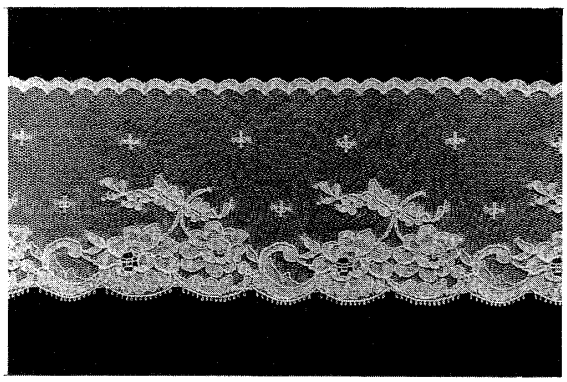
1768年にイギリスのハモンドがオープンメッシュを編む機械を最初に発明し改良して、レースに似たメッシュを作ることに成功した。以来次々と1776年に長方形のメッシュ、1795年にウェーヴマシーン、1801年にジャガード編み機、1809年にヒースコートのボビンネットマシーンによってレース工業の大々的な大量生産の基礎が定まり、ベルギーのレースやヴァランシェンヌ・レースのコピーが安価に機械生産されるようになった。

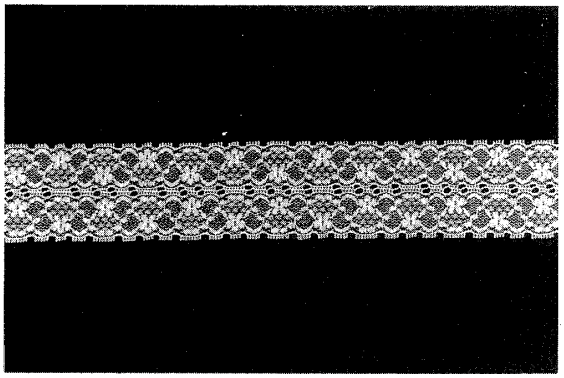
NII-Electronic Library Service

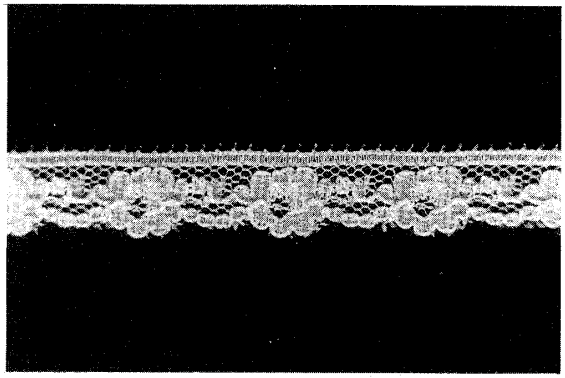
Shukugawa Gakuin College

製作に使用した日本製のレース４種

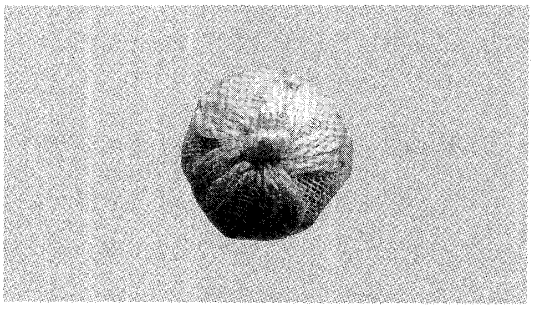








レゼー・デージーステッチをしたくるみボタン



NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

5. レセプション・ドレスの製作

製作にあたり、可能な限り実物に近い状態の複製を試みたが、以下の点についてはやむを得ず、または意図的に実物とは異なる点がある。

☆ パターン

後上身頃と後脇布の肩線にある……は三好氏の製図に筆者が補正した線である。このパターンでは、①後身頃と後脇のプリンセス・ラインの寸法が異なること（後脇の方が短い）。②後身頃の肩線と、後脇との肩線のつながりがよくないことの問題があったが、●寸法を後脇に補充することにより、上記2点が解決できるために補正した。

☆ 素　材

① オーガンジー

ボディの本体に使用したリネン糸を用いたオーガンジーは本来生成の白であったが、100余年を経た実物は、うすい茶色がかっているので、本作品もその時代性を出すために、0.15%の紅茶液で浸染を行なった。

② レース

実物は機械製バランシエンヌ・レースを使用しているが、本作品はそれとよく似た日本製レースを使用し、土台布と同様に0.15%の紅茶液で浸染を行なって色を合わせた。

☆ 縫　製

① 縫代の始末

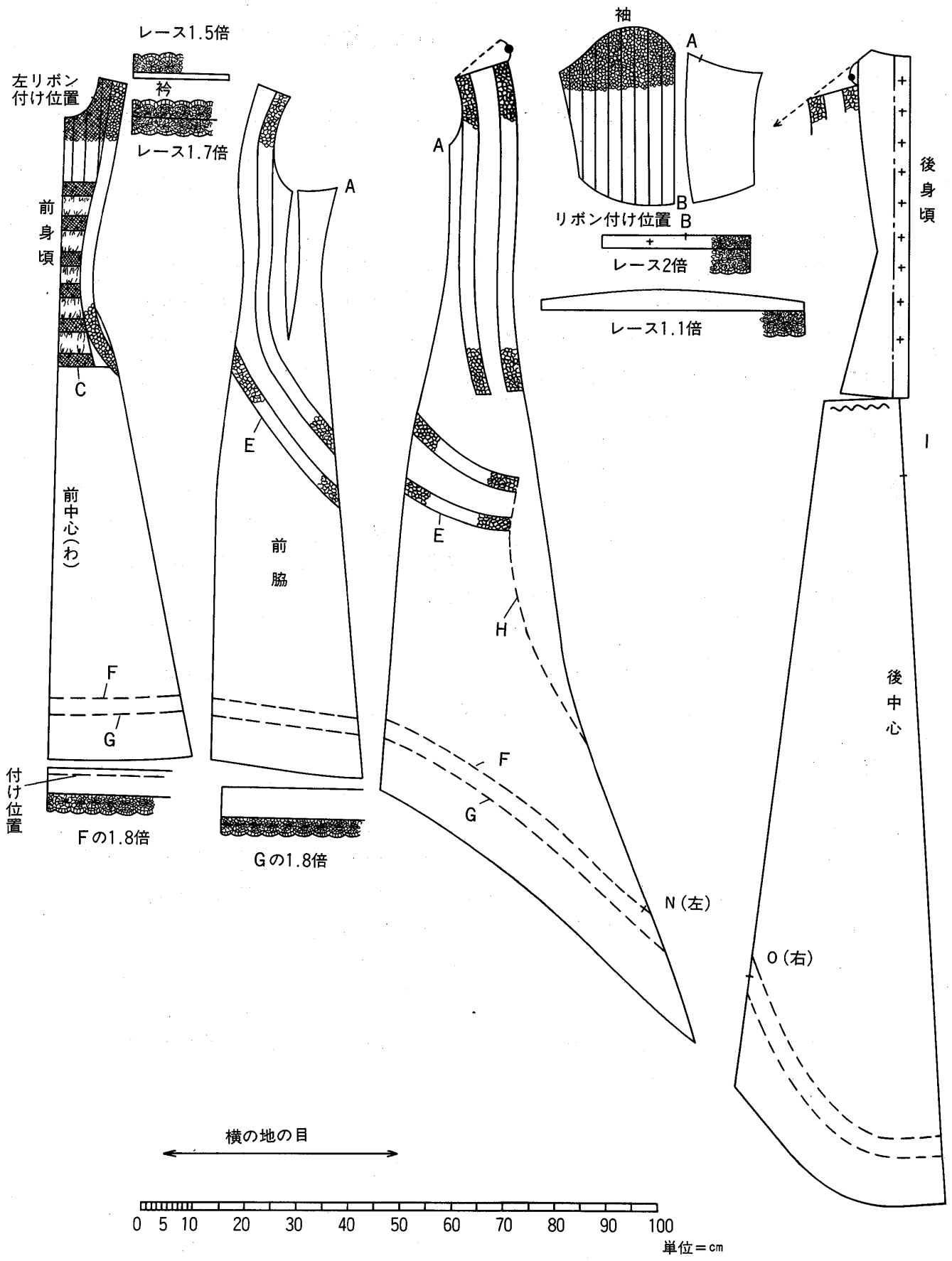
実物のプリンセス・ラインの縫合わせ、肩縫、脇縫、袖付等の各縫目線とレースをはめ込んでくり抜かれた部分などはすべて裁切の状態であるが、本作品は布の密度がやや粗いため、接ぎ目などがドレスの重みで裂けてこないよう、また今後の取り扱いや長期の保存などを考えて、念のために布端にはロックミシンをかけている。

② ボタン

くるんだ布の状態とつめものの中味を確認することは出来ないため、見た感じと触った感じで再現した。

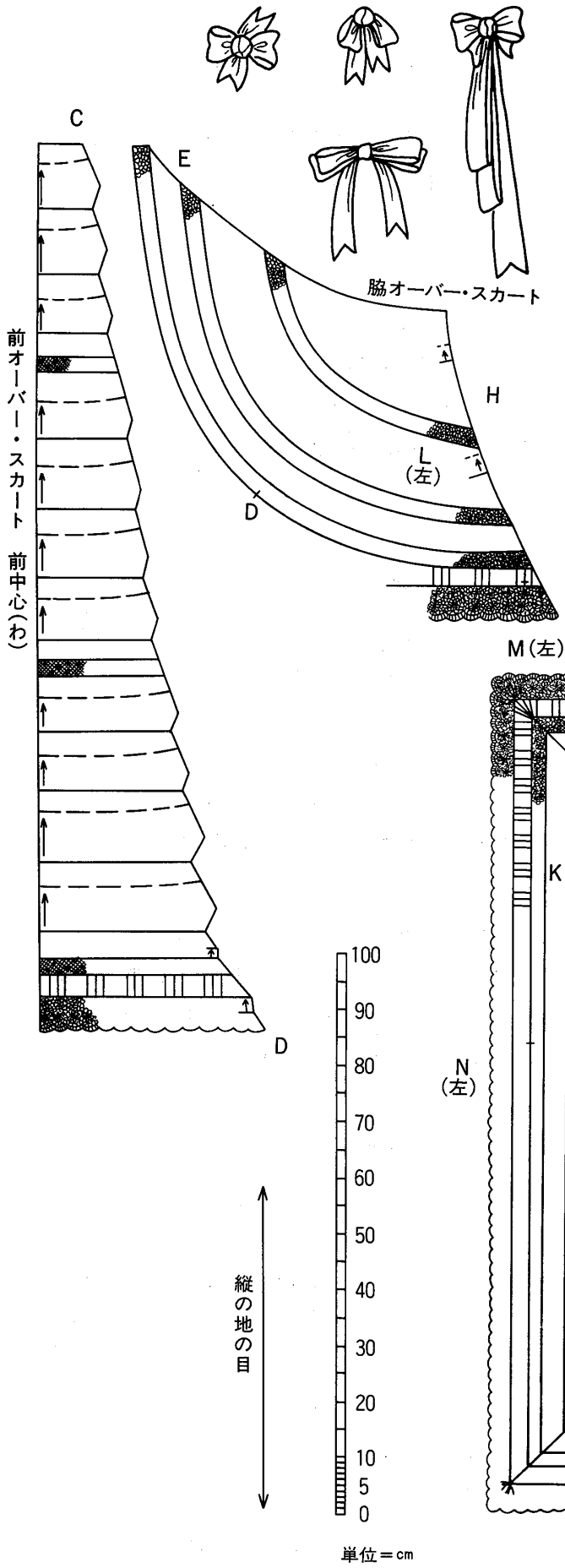
NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College



NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College



●縦の切り替え線で構成したドレスは、プリンセス・ドレスの特徴を示している　●ドレスは背開きで、レースを表に使った比翼仕立て　●トレーンのラッフル飾りは、レースやプリーツを縁取りした単純な矩形のオーガンジーをさまざまにとめ合せ、タックをとって複雑な形に仕立て上げている。(作図：三好厚子)

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

〝1870年代のレセプションドレス〟

(1) デザイン

プリンセス・シルエットで、前と脇にはオーバー・スカート、後にはトレーンを引いてレースやリボンをふんだんに使っている華やかさがポイントのドレス。

(2) 色　彩

本来は生成の白であったが、時代を経て薄い茶色がかっている。

(3) 素　材

㋑ 本体に使用されたリネン糸のオーガンジー　92cm幅—15m

㋺ レース

1cm幅—10.0m、3cm幅—6.2m、4cm幅—7.2m、4.25cm幅—19.2m、6cm幅—14m、8cm幅—12m　計68.6m

㋩ リボン

0.5cm幅—0.4m、4cm幅—8.5m、5cm幅—8.5m　計17.4m

(4) 縫　製

〈1〉後身頃（写真1）

○背明き

レースを表に使った比翼仕立て。

3cm幅のレースの両端に、1cm間隔にタックを取った1cm幅のレースを縫い付け、そのレース端が打合せ端になるよう身頃に縫い付ける。

写真　1

○ボタン

直径1cm、厚み0.5cmの布製くるみボタン。

2枚重ねにした身頃と同じ布に、直径1cm、厚み0.5cmの綿をつめて型を整えた。ボタンの表面には、レゼー・デージー・ステッチ風の刺繍をする。

○ボタンホール

大きさ1.5cmの片留めボタンホール。

9ヶのボタンホールを間隔6cmで横にあける。

○スカート後中心の縫い合わせ

縫代は上前側に片返し、上身頃と同寸にギャザーをよせる。

○上身頃とスカートの縫い合わせ

縫代は上身頃へ倒す。

○後身頃と後脇の縫い合わせ

縫代は脇側へ倒す。

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

〈2〉前オーバー・スカート（写真2）

○図の↑のように上向きにタックを取り、タックを安定させるために各段2ヵ所ずつ止め付ける。

○共布とレースでラッフルを作る。

共布で、3.5cm間隔に深さ1cmのタックを縦に3本ずつ取った4cm幅のラッフルを作り、ギャザー量1.7倍の6cm幅のレースを縫い付ける。

○3ヵ所にはめ込まれている4cm幅のレースに、上2ヵ所にはレースの下端に、裾の1ヵ所には台布の位置に上のラッフルを縫い付ける。

〈3〉脇オーバー・スカート（写真3）

㋑　3cm幅のレースに1.7倍のギャザー量を取った6cm幅のレースを縫い付ける。

㋺　3cm幅のレースに、3.5cm間隔に深さ1cmのタックを縦に3本ずつとった4cm幅の共布ラッフルを縫い付け、さらに1.7倍のギャザー量をとった6cm幅のレースを縫い付ける。

○台布に上2段には㋑の3cm幅のレースをはめこみ、裾は㋺を3cm幅レースの上端だけを縫い付ける。

○図のHの2ヵ所のタックは↑のように上向きにたたむ。

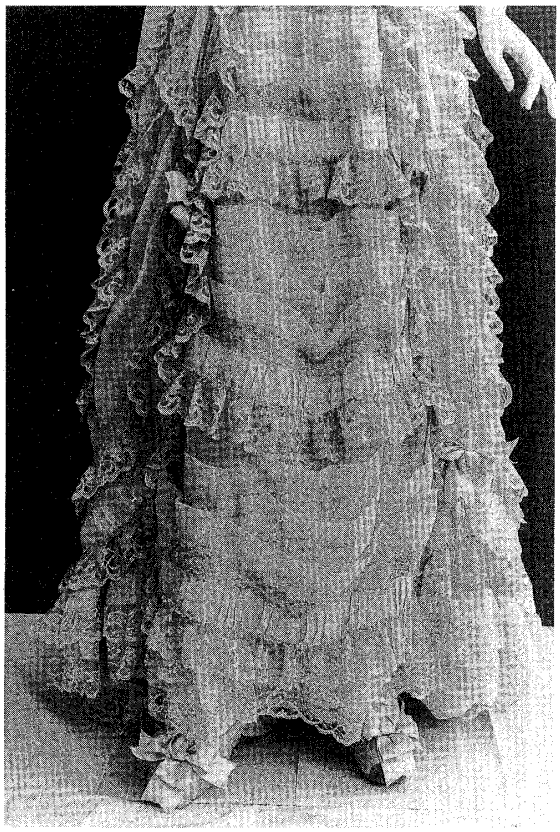


写真　2

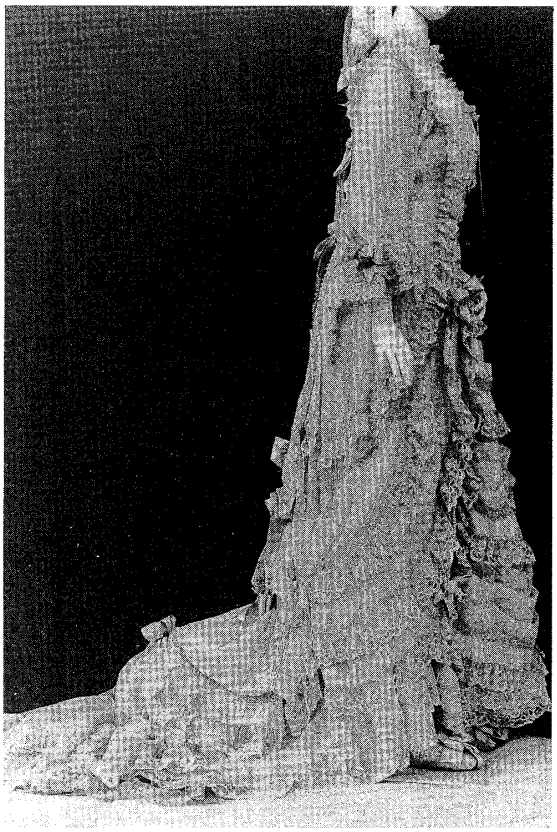


写真　3

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

〈4〉前身頃（写真4）

○上身頃㋑

① 4cm幅のレースを縦に7本接ぎ合わせる。

② ①の両側と下辺に、1.7倍のギャザー量をとった2cm幅のレースを、両側は中心側に、下辺は上向きに止め付ける。

○上身頃㋺

4cm幅のレースと、1.7倍のギャザーを上下によせた4cm幅のシャーリングされた共布を交互に、レースは6段、シャーリングされた布5段を縫い合わせる。

○㋑と㋺の縫い合わせ

㋑の上に㋺をのせて縫い付ける。

○上身頃とスカートの縫い合わせ

上身頃とスカートで前オーバー・スカートをはさんで3枚一緒に縫い合わせ、縫代は上へ倒す。

○前脇のダーツを縫い、縫代は切り落す。

○前身頃と前脇の縫い合わせ

縫代は前中心側へ倒す。

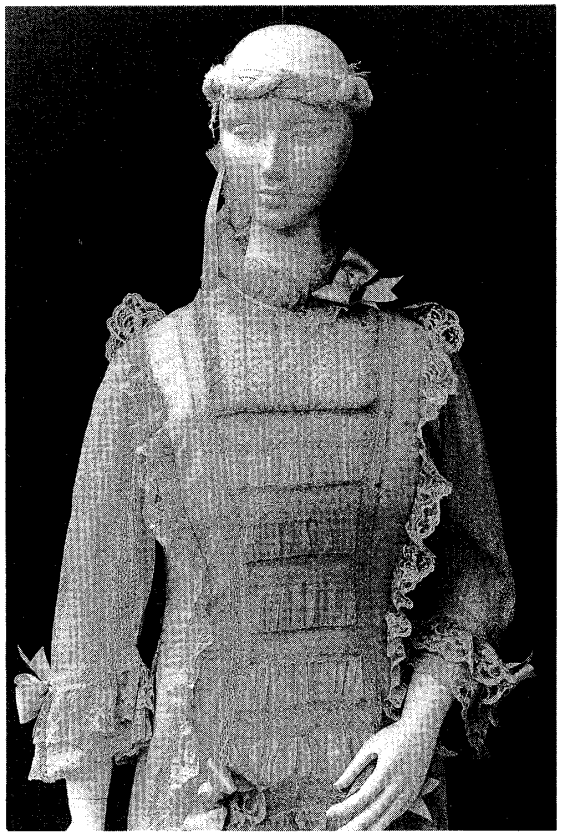


写真 4

〈5〉前オーバー・スカートと脇オーバー・スカートの縫い合わせ

○前オーバー・スカートの上に、脇オーバー・スカートをのせて、図のDの位置まで縫い付ける。

〈6〉前脇と後脇の縫い合わせ

○縫代は前身頃側に倒す。

〈7〉肩合わせ

○前後の肩線を縫い、縫代は前へ倒す。

〈8〉裾始末

○上り幅1cmに折り上げ、三ッ折縫い。

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

〈9〉レースのはめ込み

① 後脇布の肩からヒップにかけては、3cm幅のレースと1cm間隔にタックをとった1cm幅のレースを後中心側に付けて一緒に縫い付ける。布の部分はくり抜く。

② 後脇布の肩からヒップに向けてと、前脇布の肩から後脇に向けてのレースは続けて、3cm幅のレースに中心側に1.7倍のギャザーをとった4.25cm幅のレースを一緒に縫い付ける。布の部分はくり抜く。

③ 前身頃の肩から前脇、後脇にかけてはめ込む3cm幅のレースに、前脇、後脇の図Eの部分は、脇オーバー・スカートをはめ込んで縫い付ける。布の部分はくり抜く。

④ 後脇の図Hには、脇オーバー・スカートを上から縫い付ける。

⑤ 図Fの1.8倍の4cm幅の共布に、4.25cm幅のレースを縫い付けたものを4.5cm間隔位にタックをとりながら、図Fの位置に縫い付ける。

⑥ 図Gの1.8倍の6cm幅の共布に、4.25cm幅のレースを縫い付けたものを5cm間隔位にタックをとりながら、図Gの位置に縫い付ける。

〈10〉衿作り

㋑ 上り幅1cmに二つ折りをした共布の台布に、1.5倍のギャザー量の4cm幅のレースを(わ)の方に縫い付ける。

㋺ 1.7倍のギャザー量をとった4cm幅のレースを縦に2本接ぎ合わせて（8cm)、幅の中央（接ぎ位置）で衿ぐり寸法にギャザーをよせる。

〈11〉衿付け（写真5）

① ㋑の台衿で身頃の衿ぐりをはさみ付けにする。

② ㋑の付いた衿ぐりに、㋺のレース幅の中央の位置を合わせて縫い付け、縫い目の上から0.5cm幅のリボンをまつり付ける。

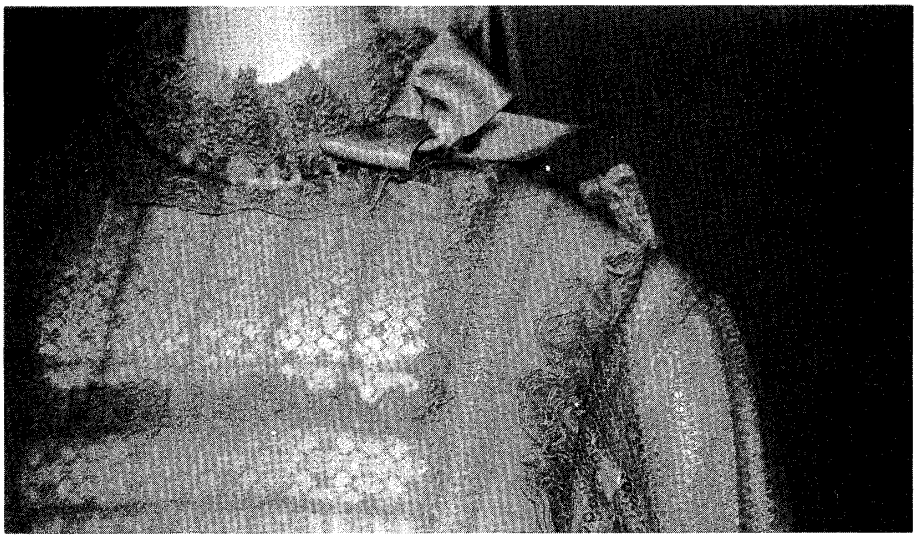


写真　5

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

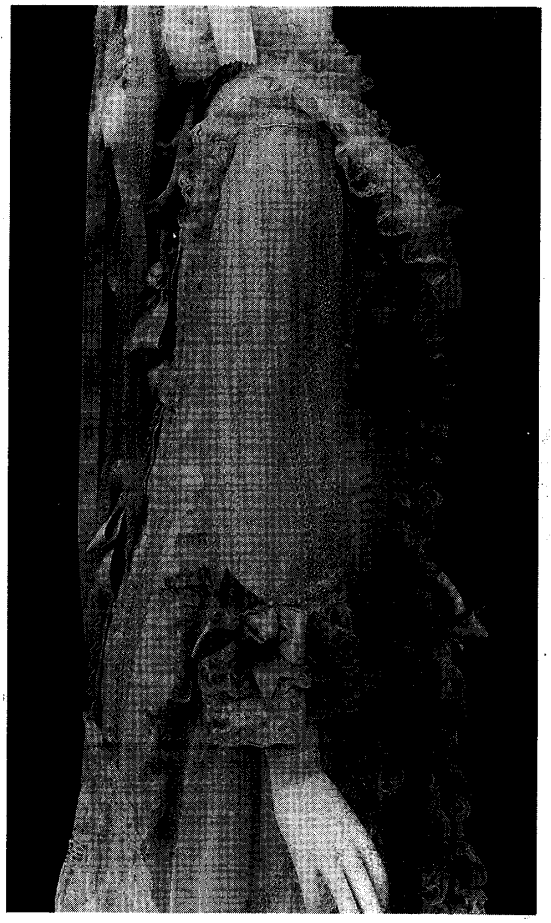


写真　6

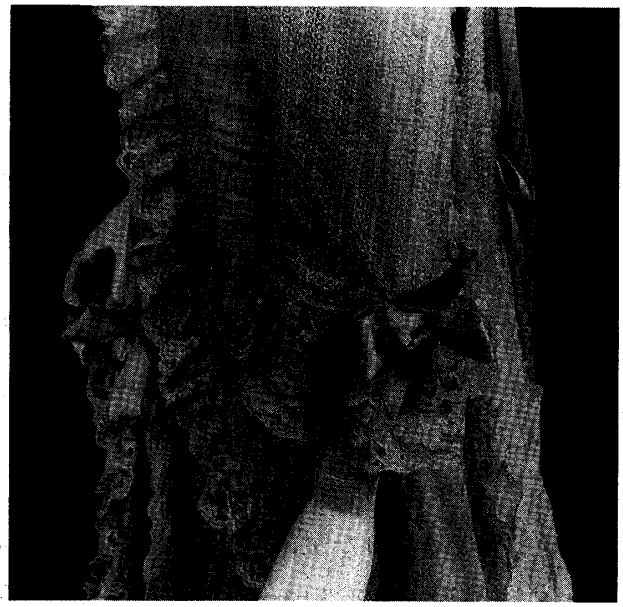


写真　7

〈12〉袖作り（写真６）

○外袖部分は３cm幅のレースを縦に９本接ぎ合わせる。

○内袖の上に外袖をのせて縫い付ける。

○袖下部分を縫い合わせる。

○袖口のレース（写真７）

㋑　３cm幅のレースを台布にして、２倍のギャザー量をとった６cm幅のレースを縫い付ける。

㋺　共布を台布にして、1.1倍のギャザー量をとった８cm幅のレースを縫い付ける。

㋩　袖布にまず㋺を縫い付け、その上から㋑をさらに縫い付ける。

写真　8

〈13〉袖付け（写真８）

○身頃と袖で0.1cmのサテンコードをはさみ、３枚一緒に縫い合わせ、縫代は１cm弱、身頃側に倒す。

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

写真９

〈14〉ラッフル作り（写真９）

① 1.7倍のギャザー量を両端に寄せた５cm幅のシャーリングされた共布のラッフルを520cm。

② 深さ１cmのタックを3.5cm間隔に縦に３本ずつとった４cm幅の共布ラッフルを581cm。

③ ３cm幅のレース、シャーリングのラッフル、３cm幅のレース、タックのラッフル、1.7倍のギャザーをよせた８cm幅のレースの順に縫い合わせる。

〈15〉トレーン（写真10）

○トレーン布に先の③のラッフルを周囲に縫い付ける。

○トレーンの図、P－P、J－J、K－K、I－I間を縫い、ギャザーをよせてつまむ。

○後スカート、脇オーバー・スカートの図I、L、M、N、Oの位置とトレーンの対応する位置とを止め付ける。

〈16〉リボン付け

○左前衿ぐり

○袖口

○後上身頃に３ヶ

○トレーンに４ヶ

○前オーバー・スカートに５ヶ

〈17〉ヘッド・ドレス…筆者のオリジナル作品

○レース　３cm幅―6.4m

○リボン　2.5cm幅―５m

写真　10

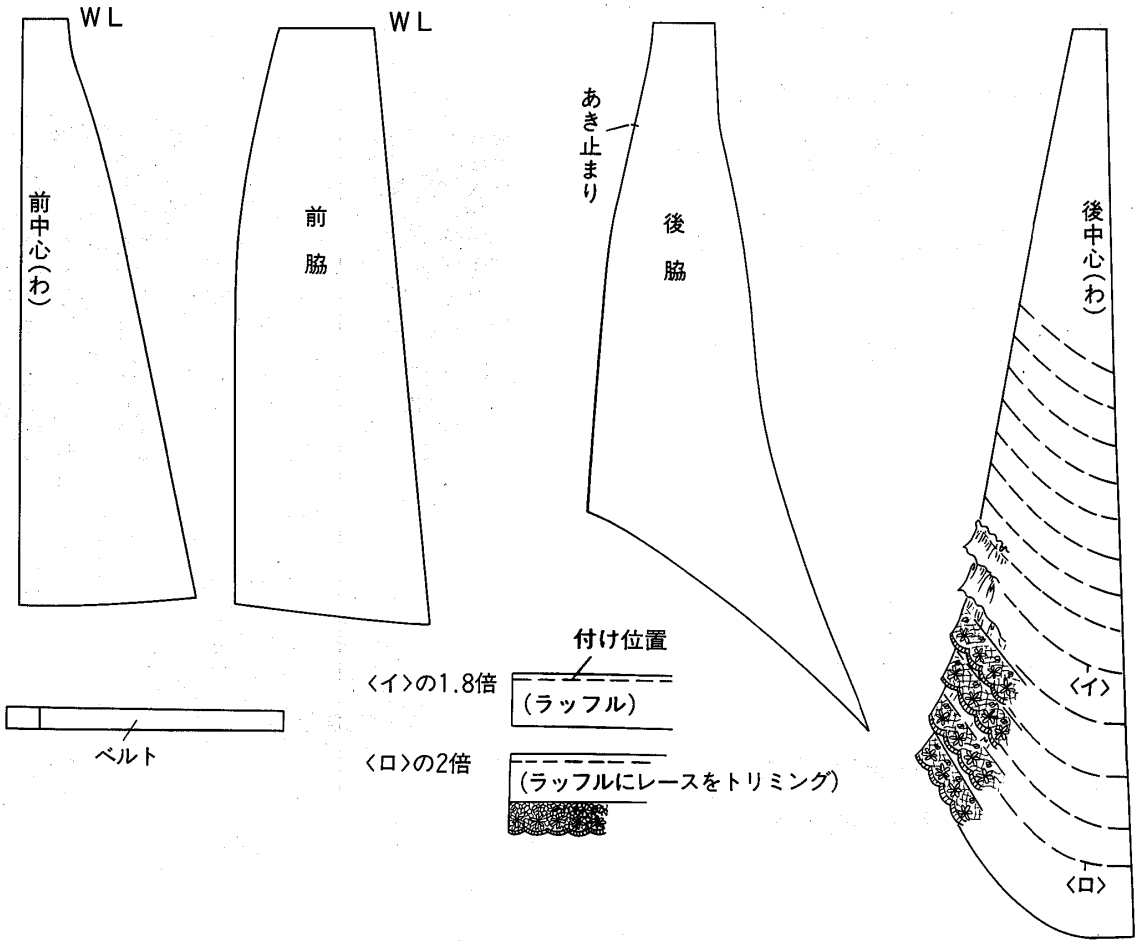
NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

ペチコート

ペチコートについては、パターンの製図はなく、三好、「機械製バランシェンヌ・レースのレセプション・ドレス」『DRESSTUDY』、SPRING、1987、19ページの文中に、「ドレスは別仕立てのオリジナル・ペチコートがついている。平織の麻を土台に共布のラッフル13段、下4段にはボビン・レースをトリミング。」とあるのを参考に、ドレスと同じパターンの製図をして、後スカートのみにラッフルの位置を図のように割り付け、(イ)1.8倍ギャザー量の10cm幅の共布ラッフルを13段付け、(ロ)下4段に8cm幅の2倍ギャザー量のレースをトリミングをした。

麻・92cm幅—6 m、レース・8cm幅—7.6m



NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

6. 結　　論

服装は社会の動きとは切り離すことの出来ない密接な関係にあり、服装の歴史始まって以来、常に社会の変化と共にさまざまな移り変りを見せてきた。産業史上最も注目すべきヨーロッパの産業革命が織物産業から始まり、深くかかわってきたということからもこのことが認識される。

〝美しくあるためには耐え忍ばねばならぬ〟というフランスのことわざがあるが、流行の衣裳を着るためには、女性は多少の苦痛をもいとわず、柔かな肉体を変形することも出来た。

これらのことも含めて考えると、現存する衣裳を細かく採寸、チェックすることにより、衣裳そのものの分析だけでなく、当時の衣裳への取りくみ方、生活態度までもが推測出来るのである。第二帝政時代の衣裳が現在まで奇麗な状態で残っているのは非常に少なく貴重である。それが華やかで高価なものだけに、特別のものとして残されたのであろうから、一般庶民のものとは少し異なっているが、複製した衣裳の周辺から以下のことが確認された。

① ドレスの出来上り寸法からこれを着用した人の体格を推測すると、ゆとり量を何センチと考えたかは不明であるが、身長は170cm位でかなり大柄な人のように思われる。
出来上りの身丈150cm、バスト寸法90cm、ウエスト寸法78cm、ヒップ寸法105cmとかなり太目である。ウエスト寸法は締め付けをゆるめると、短期間で普通に戻る傾向があり、クリノリンから解放された時期でもあり、この寸法も充分考えられる。

② 肩線はかなりなだらかで、ファッションプレート等に描かれているような締ったウエストに丸味をおびたヒップ、エレガントな撫で肩の女性が想像出来た。バストもかなり豊かである。

③ デザインは少し過剰な位のレースやラッフルが使われて、この時代の特徴がよく出たデザインである。この装飾を少なめにしてトレーンを除けば、プリンセスラインは現代でもよく好まれており、現在のパターンとはあまり変りはない。レースやフリルの付け位置などは立体裁断で確認したであろうが、身頃やスカート部分はパターンが使われていたであろう。

④ 画期的なミシンの発明、改良、普及により、高度なミシンによるテクニックが見られた。これだけの多量のレースやフリル、ギャザーなどを縫い付けたり、接ぎ合わせたり、くり抜きの技法などはミシンなくしては考えられない。

⑤ 飾りのレースの付け方が何種類にもおよび複雑である。はめこみ、縫い付け、一方の端だけ縫い付けて後は浮かすとか、縫目線にはめ込み等の複雑なデザインは、手慣れたデザイナーが手掛けたものであろう。

以上のことが考察されたが、これらの美しい華やかな衣裳を着て、会場を優雅に踊りまわるブルジョアジーの女性のために、安い賃金で貧しい暮らしを強いられながら、生涯手を通すこ

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

ともない美しく豪華な衣裳を仕上げていく裁縫女工が大勢いたことも見逃せない。昔から繊維織物産業には洋の東西を問わず、女工哀史が語られていたことは興味深いことである。

貴重な所蔵品の見学の機会を与えていただいた京都服飾文化研究財団の大友淳男氏、作品製作に当って助言をいただいたレストアラー・三好厚子氏に深く御礼申し上げます。

参考文献

○太田晶子、三好厚子、「1870年代の機械レース」、『DRESSTUDY』、SPRING、1987年、16～21ページ
○J・アンダーソン・ブラック、マッジ・ガーランド（山内沙織訳）、『ファッションの歴史』（下）、PARCO出版、1985年
○京都国立近代美術館編、『ヨーロッパのレース』、1987年
○R・B・ヨハンセン（中田満雄訳）、『着装の歴史』、文化出版局、1977年
○フィリップ・ペロー（大矢タカヤス訳）、『衣服のアルケオロジー』、文化出版局、昭和60年
○北山晴一、『おしゃれと権力』、三省堂、1985年

NII-Electronic Library Service